

## 尾張・三河の古墳時代港津遺跡とその評価

岩 原 剛

### はじめに

古墳時代の海浜部に、海と深く関わる古墳や集落・生産遺跡があり、これらが内陸部と異なる性質を持つこと、海浜地域の理解に重要な意味を持つことから、考古学界では以前より関心の対象であった。筆者がフィールドにする愛知県三河地方においても検証が加えられ（三河考古学談話会 2015・学術研究集会「海の新墳を考えるⅥ」実行委員会 2017）、また筆者自身もその中や別稿（岩原 2021）で旧地形の復元を行い、その解釈と港津遺跡としての評価を進めてきた。



図1 伊勢湾・三河湾沿岸の古墳時代港津遺跡位置図

本稿は改めて尾張・三河の古墳時代の港津遺跡を総括的に取り上げ、その特質を説明することを目的とする。方法論として、北陸地方で行った森浩一の実践を参考に穂積裕昌が取り組んだ一連の仕事（穂積 2000・2001・2005）に準拠する。なお、各港津遺跡の位置については図1を参照されたい。

### 1 知多半島周辺の様相

知多半島は伊勢湾と三河湾とに囲まれた地域で、現在も名古屋港をはじめとする中部地方の拠点的な港が存在するところである。

#### 年魚市潟

かつては半島状であった熱田台地の南側から東海市北部の伊勢湾岸一帯には遠浅の入り江が広がり、古代から年魚市潟の名前で呼ばれていた。ここが古墳時代に港津の好適地であったことは古墳の分布からも明らかで、古墳時代前期には三角縁神獣鏡が出土したカブト山古墳などが所在する東海市北部が核となり、後期には尾張氏の一大拠点として断夫山古墳や白鳥古墳、大須二子山古墳などの大型前方後円墳が築かれた熱田台地の南側に重要な港津が設けられたと推定される。

かつての港津の景観を復元するのは困難だが、遠浅の海に砂堆が点在した良港を形成し

ていたものと推定される。前期から後期への拠点の移動は、内陸の諸勢力との関係や陸上交通路とのかかわり、さらに土砂の流入に伴う自然環境の変化などが想定される。

#### 松崎遺跡周辺（図2）

伊勢湾沿岸部を代表する製塩遺跡として知られる松崎遺跡や上浜田遺跡をはじめ、法海寺遺跡や柳ヶ坪遺跡など、古墳時代中期から後期を主体とする遺跡が集中する地域であり、現在の東海市の中心部に重なるところである。遺跡は砂堤上に存在し、複数の砂堤列が連なる間に後背湿地が存在する。松崎遺跡の集落構造については早野浩二の考察があり、製塩や漁猟活動のほかに鉄器生産にも従事した屯倉的な性質を持った計画村落で、渡来系集団が在住したと推定されている（早野2005）。製塩遺跡の出現と経営を含め、海浜集落の実像として極めて魅力的な解釈といえる。



図2 松崎遺跡周辺（早野2005より）

この場合、生産した塩などの他地域への搬出のための、相応の港津施設の存在が推定される。旧航空画像などを見る限り、旧河道から連なる形で後背湿地が続いており、伊勢湾に面した広い河口部は大型船での進入が可能であった。こうした後背湿地を小規模な船着き場として利用し、広く潟湖状をなした河口部には大型船が停泊して積み替えを行ったと考えられる。河口部に大型船が着岸し、そこから小型船で各遺跡からの物資が搬出入された港津の景観を想定したい。

#### 大野（図3）

現在の常滑市大野町は中世から「大野湊」として栄え、廻船業や醸造業が盛んであった。大野町の市街地は、伊勢湾に面した砂堤上に集落が密集して独特の港町としての景観を形成している。

古墳時代の砂堤上の状況は不明であるが、その内側（東側）に当たる矢田川の河口部は「大野谷」と称される沖積地で、かつて潟湖が存在したことが容易に推定できる。この潟湖の北側の段丘上には古墳時代の集落である郷遺跡が存在し、同一の段丘上には後期古墳の寺山古墳が単独で立地している。さらに潟湖からみて南東の丘陵裾にはTK47型式期の初期須恵器窯である新田窯（前山窯）が存在しており、砂堤の内側に発達した潟湖の周囲



図3 大野



に集落、古墳、生産遺跡が存在した典型的な港津遺跡である。

#### 豊浜・片名・大井（図4）

知多半島の先端付近には小規模な湾が連続しており、いずれも小河川が流れ込んで大小の砂堤を発達させている。とくに師崎漁港のある片名は現在でも河川が砂堤に遮られて大きく屈曲しており、その地名からも潟湖が存在したと想定される。

そして各湾を望む場所に古墳が点在し、もしくは古墳時代の集落遺跡が所在しており、これらが古墳時代にも港津として利用されたことを推定させる。いずれも発掘調査が行われていないため詳細は不明だが、継続した複数基の古墳が認められないことから、特定の時期に集中して港津が整備された可能性がある。

なお、知多半島の先端・師崎から3～7 kmほど離れた三河湾上には三河湾三島が存在し、佐久島には47基、日間賀島に35基の古墳が所在するほか、篠島の神明社貝塚は外洋性漁撈にも携わる海人集団の遺跡で古墳時代の遺物が豊富に出土している。こうした島々との交流基地、または知多半島の先端という位置から、沿岸航海の避難港としての性格が想定される。

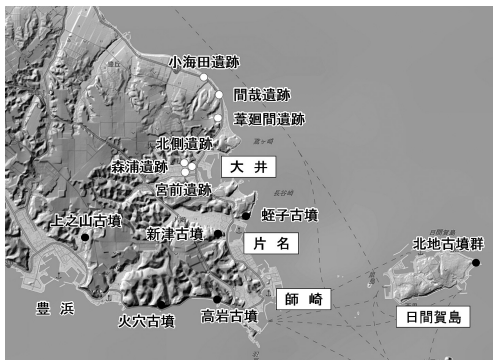


図4 豊浜・片名・大井

#### 富貴（図5）

愛知県知多郡武豊町の富貴地区は、三河湾に面しその最奥部である衣浦湾口に位置する。地形的には海浜部に砂堤が発達し、その内側は東から段丘が伸びる。段丘と砂堤とに囲まれた部分は河口部に形成された沖積低地で、こうした場所が古墳時代には小規模な潟湖地形となり、港津として利用されたことは想像に難くない。

ここでは臨海の段丘上において、6世紀半ばに山崎古墳が単独で築かれた。山崎古墳は豊富な鉄器を副葬し、その内容から被葬者は各種の生産や地域開発を担った入植者であったと推定されている。またウスガイト遺跡は付近の拠点となる集落遺跡であり、浦之島遺跡や市場遺跡は山崎古墳の築造を契機にして砂堤上に営まれた製塩遺跡である（「海の古墳を考えるVI」実行委員会2017）。松崎遺跡ほどではないにしても古墳、集落、生産遺跡がセットして認められる港津遺跡と理解される地域である。

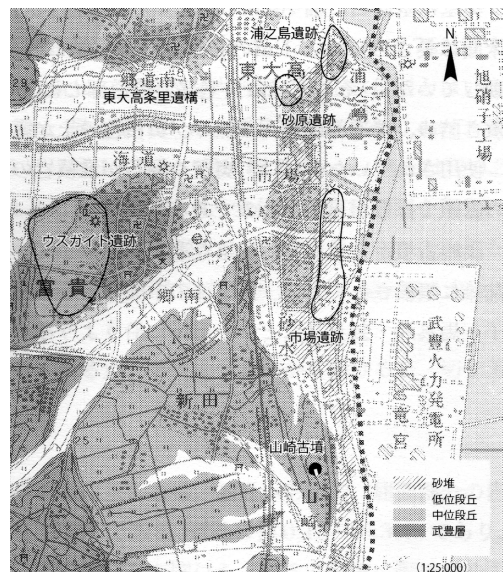


図5 富貴（「海の古墳を考えるVI」実行委員会2017より）

## 2 西三河海浜部の様相

西三河は三河湾の沿岸部である。この地域については西島庸介が様相をよくまとめており（西島 2015）、本稿ではそれに従いながら若干の私見を加える。

### 衣浦湾（図6 D・E）

衣浦湾沿岸部には古墳時代の集落遺跡や製塩遺跡が多数分布している。このうち大江遺跡は古墳時代前期の土器が出土したほか、前期の清水式製塩土器が50点以上出土しており、衣浦湾沿岸における前期の拠点集落と目される。ただしこのほかの遺跡はいずれも小規模で、古墳は極めて少なく、臨海の古墳としては高浜市枕返塚古墳1基が確認されるに過ぎない<sup>(1)</sup>。港津遺跡は当然存在すると思われるが、後期以降に製塩遺跡が多数出現し

生産地として活況を呈する一方、注意すべき港津遺跡が認められない地域である。

### 油ヶ淵（北浦、図6 G～K）

現在の碧南市と安城市との市境に所在する油ヶ淵は、かつては「北浦」と呼ばれ、三河湾から大きく湾入した内海であった。ここが海と隔てられて油ヶ淵になったのは江戸初期の矢作新川の開削とそれに伴う堤防築造によるものである。

現油ヶ淵の周辺には遺跡や古墳が点在している。内海の開口部東岸に位置する清水式製塩土器の標識遺跡である清水遺跡では、前期から後期の土器が出土しており、6世紀以降も土器製塩が行われるなど長期間にわたって継続した拠点集落である。また北岸には後期の貝ス遺跡があるほか、松崎類や知多式製塩土器を伴う遺跡が集中する。古墳は少ないが、内行花面鏡が出土した前期の北本郷古墳をは

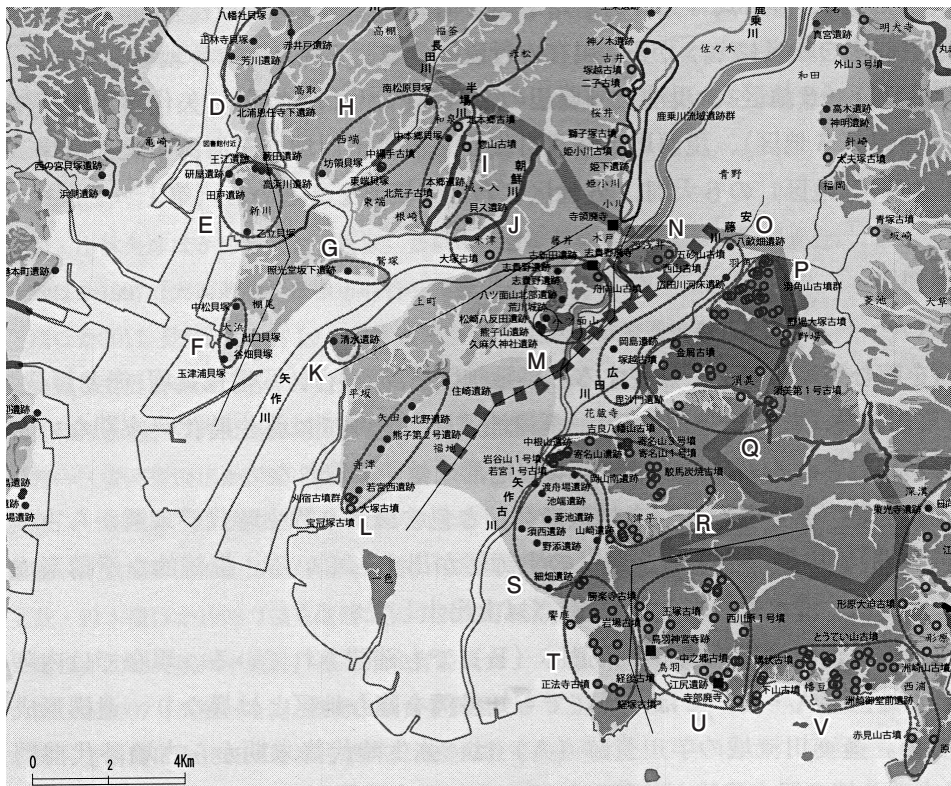


図6 西三河海浜部の様相（西島 2015 の図を抜粋）



じめ、中期から後期の古墳が点在する。こうした状況から、前期よりこの地域を本拠地とする首長が存在する中で中期から後期へと継続して海浜部が利用され、さらに後期には生産遺跡が展開したと解釈される。

港津の具体的な位置や構造は、地理環境が激変しているため想定することは難しいが、松崎遺跡と類似した集落像が推定される清水遺跡付近は沖積地の幅が最も狭くなっており、この付近に砂堤が発達し、内部に広大な潟湖を形成していた可能性がある。

#### 矢作古川河口部西岸（刈宿、図6 L）

矢作古川の河口部は、中世以前は三河湾から大きく湾入した広大な入り江であった。現在の海岸線から2.5～6 km程度まで湾入しており、そこではおもに近世にかけて干拓が進められた。また河口部の近くで矢作古川は網目のように分流し、多量の土砂を搬出しながら頻繁に流れを変えていたと考えられる。この河口部に存在した入り江の西・北・東側を取り囲むようにして多数の遺跡や古墳が分布する。中でも特筆されるのは河口部の西岸（刈宿）と東岸（吉良）である。

河口部西岸の、三河湾に突き出した段丘の先端付近には古墳時代中期から終末期の拠点的な集落遺跡である若宮西遺跡が存在し、刈宿古墳群のうち宝冠塚古墳は大型横穴式石室を有した終末期の古墳である。刈宿古墳群の継続時期は不明だが、この地域の歴代首長墓と目される。ただし港津の存在は不明瞭で、誤りを恐れずに言えば、段丘の西側にあたる上浜田・下浜田付近が候補地と言えよう。

#### 矢作古川河口部東岸（吉良、図6 R～T）

古墳時代前期後葉から中期にかけて、西三河で最も重要な港津が存在したと推定される地域であり、集落遺跡数や古墳の数、内容ともに三河湾沿岸部では屈指の内容である。

集落はおもに沖積低地で確認され、前期の

渡船場遺跡や中期の岡山南遺跡、後期の細畑遺跡など長期間にわたり遺跡群が展開する。一方、前期古墳は北部の岡山丘陵上に前期後葉の首長墓群が存在し、全長66 mの前方後円墳・吉良八幡山古墳や直径30 mの円墳である若宮1号墳、善光寺沢南古墳などがある。さらに南部の丘陵上には三河地方最大級、全長95 mの正法寺古墳や全長30 mの帆立貝形古墳・岩場古墳などの中期古墳が存在する。とくに正法寺古墳は三段築盛の墳丘構造で伊勢の宝塚1号墳との墳形の共通性が指摘され、正法寺古墳・岩場古墳ともに畿内系の技術をもとにした埴輪を保有するなど、ヤマト王権との直接的な関係が想定される重要古墳である。これら首長の居館を含む中心集落は今のところ特定されていない。

正法寺古墳は三河湾に突き出す丘陵の先端に築かれており、海とのかかわりは一目瞭然である。その拠点となるべき港津の位置は明らかにはできないが、前期首長墓群の位置からすれば集落遺跡が集中する沖積低地付近を想定すべきであろう。この港津は外洋と西三河内陸部とを結節する地として、古墳時代中期中葉まで地域権力の政治拠点であったと考えられ、首長居館は港津にほど近い沖積低地、あるいはそれを臨む丘陵裾の、水害の影響が少ない場所に設けられたと考えられる。

なお、前期古墳が所在する岡山丘陵は、海を望むと同時に北側の矢作川下流域を広く望む場所でもある。一方、中期古墳は海への眺望、そして海からの展望を最重視した立地となっており、首長墓は海とのかかわりをより深めている。首長の性格の変化を示すものとして注意される。

#### 幡豆（図6 U・V）

先の矢作古川河口部東岸に隣接したところで、現在西幡豆・東幡豆と称される二つの入り江を中心とする地域である。集落遺跡の様相は調査事例が少ないため不明瞭だが、周辺

には数多くの古墳が集中する。

西幡豆の中ノ郷古墳は、海岸から至近の段丘上に築かれた中期後葉の北部九州型横穴式石室（横田下タイプ）を有する古墳で、海を介した遠隔地の首長層との直接的な交流を示す重要古墳でもある。西幡豆は古代に寺部廃寺や鳥羽神宮寺が設けられるなど、中期後葉以降も地域権力が古代まで継続したところでもある。一方東幡豆では後期古墳が多数築かれており、佐久石製の石棺を有した大型横穴式石室を有し、豊かな副葬品が出土したという山古墳をはじめ、下山古墳や講伏古墳などの後期古墳が知られている。

古墳時代の港津の具体的な位置と構造は明らかにしがたいが、中ノ郷古墳の所在する段丘の西側は複数の河川が流入して沖積低地を形成しており、ここが港津の候補地になる。この地は低い峠を挟んで矢作古川河口部東岸（吉良）に隣接し、正法寺古墳からほど近いことも注意される。自然災害など何らかの理由で矢作古川河口部東岸の港津の機能が低下し、首長が幡豆に拠点を移したことも想定範囲である。そして後期には周辺の開発や港津整備が進み、集団の移入などを含め東幡豆が発展したものと推定する。

なお、東幡豆からさらに東側にかけて、西浦半島を含むもう一つの入り江が形成されており、ここにも多数の後期古墳が確認されて

いる。東幡豆と同様の理由で港津整備を含む地域開発が進められた地域であったと考えられ、海浜部の洲崎御堂前遺跡で6世紀後半から製塩活動が行われている点は注意される。

### 3 東三河海浜部の様相

東三河は豊川の河口部に広大な沖積低地が発達しており、そのほか大小の河川が三河湾に流れ込む。三河湾沿いは砂の堆積が著しく、遠浅の海がよく発達している。なお、太平洋岸には古墳時代の集落遺跡や古墳は極めて少なく、現田原市赤羽根町付近を除き港津遺跡は想定できない。したがって以下の地区はすべて三河湾沿岸に所在するものである。

#### 御津（図7）

豊川市の音羽川・佐奈川河口には三河湾に沿って砂堤が存在し、沖積低地には微高地が散在する。砂堤の先端は古来から「安礼乃崎」と呼ばれた歌枕の名所であり、近世の文献によれば、砂堤の内側には東西2か所の潟湖が存在したとされている（久曾神1967）。この潟湖は、古代には三河国府の外港として使用されたと推定されており（藤岡1964）、古代には音羽川によって国府と連絡していた。また東海道や二見道（後世の姫街道）が付近を通過するほか、恐らく平坂街道の前身となる

交通路が周辺に所在するなど交通の要所でもある。

付近では、中期後葉に、後に設置される国府と同一の段丘上に全長95mを測る三河地方最大級の大型前方後円墳・船山1号墳が築造されている。船山1号墳は三段築成で葺石を持ち、くびれ部の左右に造出を持つ。造出では畿内直結の食物形土製品を用いた儀礼が

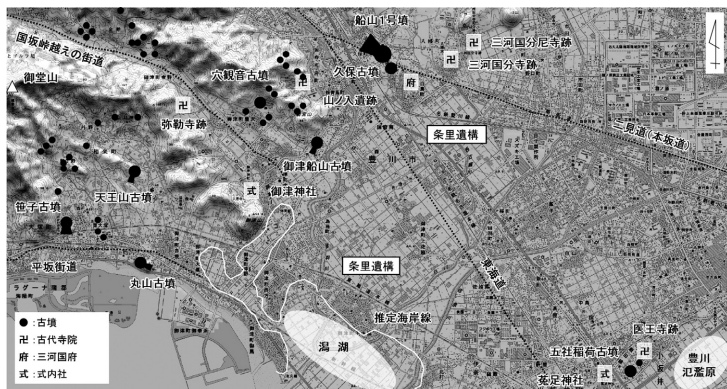


図7 御津



執行され、埴輪の導入は東三河において埴輪生産体制を確立させる端緒となった。西三河の正法寺古墳と並んで古墳時代の一大画期を反映したと見なされる古墳である。その後も潟湖の西岸に御津船山古墳や赤根天王山古墳など全長 40 m 程度の前方後円墳が築造され、後期には大型横穴式石室を有する穴観音古墳が築かれた。船山 1 号墳と比較して権力の低下は否めないが、首長墓の築造は中期後葉から後期末まで継続しており、拠点となる港津も継続し続けたと言えるだろう。ただし、6 世紀以降は後述する奥渥美湾沿岸の方が権力を充実させているため、古代寺院がこの地に多く造られる 7 世紀後葉以降に再び地域を代表する港津としての地位を取り戻したと捉えられる(岩原 2021)。

## 奥渥美湾 (図 8)

三河湾のうち、蒲郡市から豊川市・豊橋市の沿岸部、さらに田原市の汐川河口にかけての奥まった部分は渥美湾と呼称されている。ここではその中でも最奥にあたる豊橋市沿岸部から汐川河口にかけてを「奥渥美湾」と仮称する。

この付近は江戸時代以降の干拓によって様相を激変させているが、近代までは田原市側から北東方向に向かって長く伸びた大洲崎によって深い湾が形成され、遠浅の海が広がっていた。湾内の中央には砂堆によって形成された大津島があり、近代までは住民があったとされる。さらに幕末に作成された『伊能全図』には、この湾口を北東から南西にわたって区切るかのようにして、「水中洲」と記された半海中の砂嘴が描かれており、幕末まではこの砂嘴と大洲崎、さらに大津島によって湾内はきわめて安定した海域だったと推察される。

奥渥美湾沿岸では、砂嘴の北側の付け根にあたる台地上に前期前葉の前方後方墳・市杵嶋神社古墳が築かれているが、継続して古墳が認められるようになるのは後期初頭から

で、三ツ山古墳、車神社古墳、妙見古墳などの40～50 m程度の前方後円墳が奥渥美湾沿岸の柳生川・梅田川・紙田川河口に点在して築かれた。また神明社古墳や磯辺王塚古墳、牟呂王塚古墳、今下神明社古墳、宮脇1号墳などの優秀な金銅装製品を副葬する首長墓が築かれており、沿岸部一帯に後期から7世紀前葉にかけて安定的に地域権力が存在したことを物語る。金銅装製品からはそれを下賜したヤマト王権との深い関係性が斟酌され、港津群の集合体として広大な渥美湾一帯が王権に重要視され、その地域力を向上させたと目される。なお、奥渥美湾北岸では5世紀後葉から末葉にかけて埴輪や須恵器生産窯が導入されるなど、地域首長による殖産興業政策が図られている。

集落遺跡の様相は不明瞭であるが、集落自体は沿岸部に広く展開しており、首長墓が築かれた各河口の港津には、それぞれの首長たちの根拠地であり、拠点となる集落遺跡が存在したと推定される。柳生川河口に近い大西遺跡は終末期の首長居館を含む集落遺跡として注目され、牟呂王塚古墳に続く首長の居館であり、古代の豪族居館である市道遺跡の前

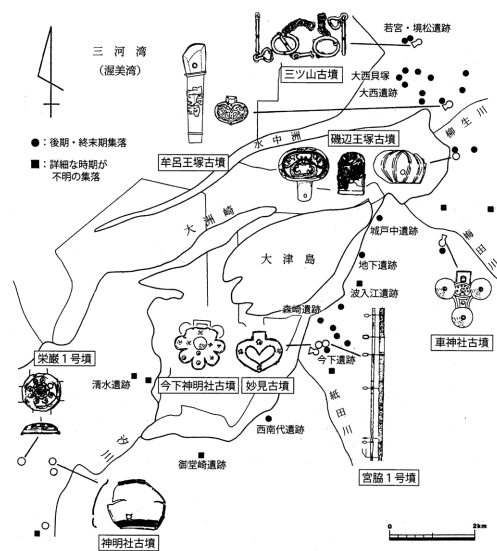


図8 奥渥美湾（岩原 2015 より）

身である。

#### 福江湾（図9）

渥美半島の先端に近い三河湾側には、遠州灘と三河湾内の沿岸流に起因する、東西から長く延びる砂嘴によって天然の防波堤が形成されている。その内側は福江湾と呼ばれ、現在も福江港を中心に渥美半島先端部の中心地として栄えている。

集落遺跡には畠貝塚、青山貝塚・貝の浜貝塚などがある。畠貝塚は福江湾の最奥部に位置し、古墳時代前期前葉の土師器や脚台式製塩土器が採集されている。また伊川津砂嘴の先端、標高2～2.5 mほどの低地に存在する青山貝塚・貝の浜貝塚は前期後葉を嚆矢として、中期の土師器・須恵器を中心に、古代の須恵器まで確認された集落遺跡で、外洋に面した低地という被災しやすい場所にもかかわらず多数の堅穴建物跡が確認されている。ここでは中期から後期にかけて盛んに製塩活動が行われ、渥美式製塩土器のほか知多式類似の製塩土器も認められる。このほか鏡形土製品や中期の鉄製鎌が出土するなど、東三河において出色の内容である。中期に遡る須恵器の豊富な出土量から、須恵器流通の基地でもあったことが推定される（石川 1987）など、物流拠点としての性格が考えられる。

福江湾沿岸部の古墳時代集落は前期前葉から認められる。ただし、中期における製塩技

術の外部からの移植と製塩活動の盛行、青山貝塚・貝の浜貝塚にみる物資の集中、つまり物流拠点としての性質が注意される。以上は知多半島の松崎遺跡や西三河の清水遺跡、若宮西遺跡の性質に通じており、同様の経緯で設けられた集落と考えられる。

一方、確認された古墳は少ないが、方墳の稲荷山古墳は20×15.5 mの長方形を呈しており、葺石を持たず、渥美半島で唯一中期以前に遡る古墳とされている。福江湾を遠望する段丘端にある同墳の被葬者は、古墳時代中期の地域的な高揚を背景に出現した首長層の墓と目され、特異な墳形からは渡来系氏族との関係も想起される。さらに羽根古墳から5世紀末葉の須恵器の坏身が出土したこと、保美貝塚の子持ち勾玉なども、福江湾沿岸部の中期の活発化を反映する遺物と見なされる。

#### 山崎遺跡

山崎遺跡は、渥美半島の中ほどにある集落遺跡である。三河湾沿岸からは直線距離にして3 kmほど離れた内陸に所在し、丘陵の斜面から谷底平野にかけて遺跡が展開する。この地は、中世に栄えた馬草湊から、今池川を遡ったところである。発掘調査では建物に伴うと考えられる石列や貝層が検出されており、土器や木製品など大量の遺物に恵まれた。

出土遺物は前期前葉から後葉、中期、後期、終末期、さらに古代にかけて長期間に及ぶ。このほか祭祀の執行をしめす手づくね土器や青山貝塚出土鏡形土製品に類似する円盤状土製品、金属器の生産痕跡であるふいごの羽口、製塩土器、そして豊富な木器群があり、本遺跡は生産機能を備えた渥美半島を代表する古墳時代集落である。

山崎遺跡の構成員の墓として、隣接する丘陵上には地部道古墳群や向山古墳群などの群集墳がある。墳丘規模は小規模な事例が多く、山崎遺跡を構成する人々の階層を判断する材料となろう。ここには地域の最有力層は居住

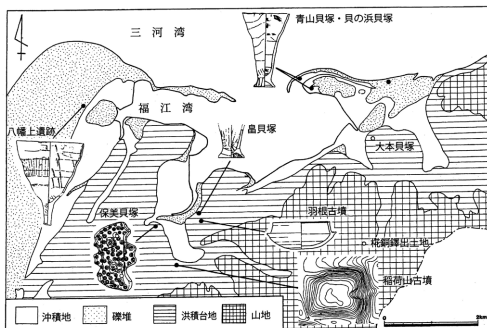


図9 福江湾（岩原 2015 より）



せず、山崎遺跡の範囲は汐川の河口、すなわち奥渥美湾沿岸部の南西側に所在する首長墓群に葬られた有力者の膝下に帰属したと考える。

山崎遺跡は、海辺の遺跡との強い結びつきが推定され、海を通じてもたらされた物資や海産資源を内陸へ流通させるうえでの拠点として機能した可能性が高い。いずれにせよ、内陸にあっても海浜部との関わりが深い集落遺跡として、注意すべき存在である。

#### 4 尾張・三河の古墳時代港津遺跡の特徴

以上、尾張・三河の古墳時代港津遺跡を概観してきた。もちろん、ここに漏れている港津遺跡は多数存在し、そもそも小規模な船着き程度であれば遺構の検出は困難である。

古墳時代の大型船は準構造船、小型船は丸木舟である。準構造線は構造線に比べて喫水が浅いため、後世のような深く掘削された港湾を必要としない。一方で、積載能力や海上の安定性において構造船より大きく劣っていた。こうした事情が遠浅で天然の防波堤である砂堤・砂嘴・砂堆を有した潟湖を積極的に港津として利用させることになったと言えるだろう。しかしそうであっても、穂積裕昌が指摘するように古墳時代の港津遺跡の役割は一樣ではなく、規模は大小さまざまである。以下では穂積の分類(穂積 2000)を参考にしながら、尾張・三河の港津遺跡の分類を試みたい。

①大型港津：大型船の進入と停泊が可能な規模を有し、有力首長の本拠地として物流拠点にもなったと考えられるところ。

尾張－年魚市潟

西三河－矢作古川河口部東岸(吉良)

東三河－御津、奥渥美湾

②中型港津A：大型船の進入と停泊が可能な場所で物流拠点となったほか、穂積が挙げた

港津の根拠となる生産遺跡が設けられたが、有力な首長墓は確認されないところ。

尾張：松崎遺跡周辺、大野

西三河：油ヶ淵(北浦)、矢作古川河口部西岸(刈宿)、幡豆

東三河：福江湾、山崎遺跡

③中型港津B：大型船の進入と停泊が可能な場所で、有力な首長墓や物流拠点、生産遺跡などが確認できないところ。航海時の緊急避難的な性質をもった港津など。

尾張：片名

なお、渥美半島の先端に近い福江湾も緊急避難港としての性質が考えられる。

④小型港津：大型船の停泊が困難なもの。潟湖地形のほか小規模な入り江なども存在する。

尾張：豊浜、大井

西三河：衣浦湾

以上は恣意的な分類と言えればそれまでだが、さらに補足するなら、熱田台地の大型前方後円墳群と年魚市潟、正法寺古墳と矢作古川河口部東岸(吉良)、船山1号墳と御津のように、その首長の存命時において首長居館が営まれた地域の中心地となり、その膝下に物資が集散したと考えられる。単なる港津を越え政治・経済の中核を成した重要拠点であり、進入する大型船に大型の墳丘を見せつけることで首長権力を遺憾なくアピールすることを意図している。奥渥美湾では旧国を代表する有力首長は認められない代わりに、湾に注ぐ各河川の河口部にはそれぞれ、金銅装製品を保有する首長たちが自らをアピールするかのように前方後円墳を築いており、地域の総体として政治・経済力が高く評価される。

また中規模港津Aは、中小首長によって支配されたところで、有力な首長墓は認めがたいが、遺物の出土量が極めて多くかつ内容が多彩で、鉄器生産や製塩、須恵器生産など生産遺跡が導入されるなど、多角的な地域開発が港津を中心に展開されたところと言える。先に挙げた早野浩二が指摘する屯倉的な計画

村落、すなわちヤマト王権や地域の大首長の関与のもと、意図して設定された可能性があるところでもある。

中型港津Bは、豊富な遺物の出土は認められないが、その規模や立地から緊急避難的な港津と想定されるところで、有力者の権力基盤から離れた片名のように、出土遺物に恵まれないところがある反面、福江湾では中型港津Aが役割を兼ねていたと考えられる。片名に比較して広大な福江湾の規模、後背にある陸地の面積などが性格の差異にも現れている。

小型港津は、物資の積み出しや中継地のほか、漁撈を目的にするものと考えられる。明らかに物流の中継地と確認されるところは無いが、近在の例では三重県紀北町の道瀬遺跡のように、5世紀後半の須恵器や関東系土師器が多量に出土した小型港津がある。

## 5 太平洋沿岸の港津と交通

尾張・三河の海浜部に異なる役割を担った港津が分布することを説明した。最後に、東海から関東にかけての海上交通の中での港津遺跡と、尾張・三河の位置づけについて触れておきたい。

### 三重県の古墳時代港津とのかかわり（図1）

本稿に大きな示唆を与えている穂積裕昌の一連の仕事により、三重県域の古墳時代港津の様相が明らかにされている。三重県は伊勢湾と熊野灘に面した東向きの南北に長い形状であり、尾張・三河に対面し、さらに東国をも射程に望む地域である。大型前方後円墳が存在する伊勢ではほぼ等間隔に大型港津が並存しており、有力首長の存在とリンクしているとともに、伊勢湾内での頻繁な交通と交流が想定されるところである。さらには津市雲出島貫遺跡から前期の外來系土器（伊勢以外の特徴を有する土師器）が多量に出土していること、道瀬遺跡や伊勢市高ノ御前遺跡での

中期の関東系土師器の出土など、古墳時代を通じて遠隔地との交流が認められる物証があり（宮原 2015）、北勢から南勢までまんべんなく存在する須恵器窯の分布も、製品の流通を担う港津の役割を助長するものである。

したがって、伊勢と尾張・三河との交流は相互の土器の搬入状況を含め陸海路を通じて頻繁に行われたと想定され、とくに三河との関係は三重県松阪市宝塚1号墳と正法寺古墳との関係に象徴されるように、海路の利用が最も適当である。

なお、志摩半島から南は大型港津が拠点的に点在しながら、その間に無数の中型・小型港津が分布している。後背に平地をほとんど持たない各小地域で港津が個別に設けられたことを示しており、知多半島や渥美半島でも類似した状態であったと考えられる。こうした小型港津から大型港津に運ばれた物資が、大型船によって外洋に向け効率的に運搬されるのだろう。そこには岩礁で採取される海産物もやその加工品が多く含まれていたと推定される。

### 太平洋沿岸諸港津との関係（図10）

太平洋沿岸の各地には古墳時代の港津が存在し、相互に交流・交通の基地として機能していた。尾張・三河の港津もこうした交流網の一端を担い、ある時は重要な交通拠点を務めた時もあったと考えられる。

図10では、東海から関東にかけてのおもな港津遺跡を挙げ、時期別での遺跡の分布を示した。こうして見ると、古墳時代の全期間を通じて機能した港津は、雲津川右岸・的形津や大之浦、浮島沼など極めて少ないことが理解される。つまり時期により、使用される港津の位置は変動するのである。

古墳時代前期には、拠点的な港津が太平洋沿岸の各地にすでに存在し、雲出川右岸・的形津（三重県松阪市向山古墳）、大之浦（静岡県磐田市松林山古墳）、庵原（静岡県清水



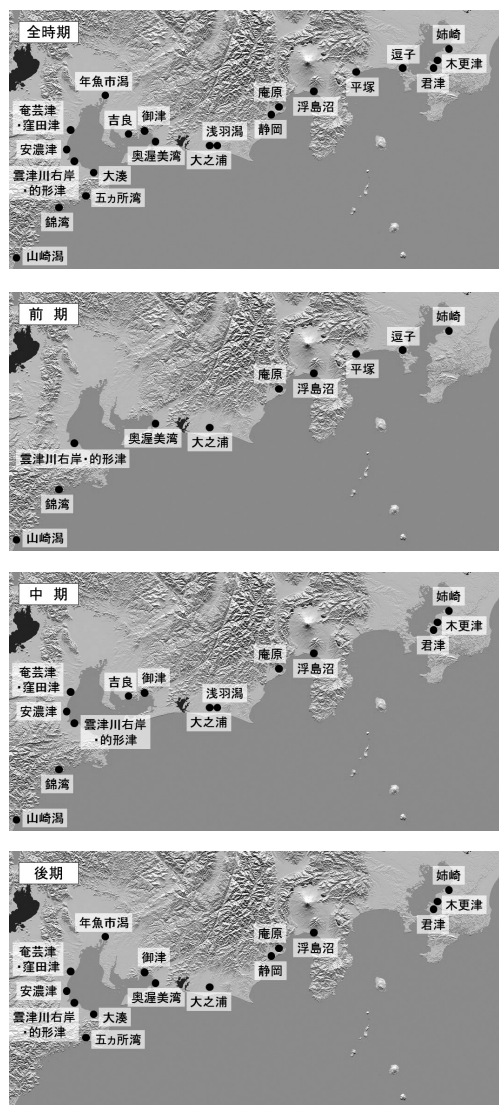


図 10 太平洋岸の主要な古墳時代港津遺跡

市三池平古墳)、浮島沼(静岡県富士市浅間古墳)、逗子(神奈川県逗子市長柄桜山古墳群)、姉崎(千葉県市原市姉崎天神山古墳)などに大型前方後円墳・前方後方墳が存在し、前期からヤマト王権と深い関係を結んでいたところが認められる。もとより存在した太平洋沿岸航路を王権がテコ入れる形で海上交通網が整備されはじめ、地域拠点が各地に形成されることを助長したと理解される。

三河では前期に全長 60 m の前方後方墳・

市杵嶋神社古墳が築かれているが、単に有力者が海浜部に出現したと受け取るだけでなく、こうした交流網の一部に東三河海浜部が取り込まれた可能性を示している。

中期には大型前方後円墳が海浜部に出現し、港津の数も増加傾向にある。特に伊勢と房総半島で大型港津の数が増加することは注意され、発着地の関係をうかがわせており興味深い。また中期には新たな港津が出現しており、地域首長権の交代が港津の変化に連動しているのだろう。三河では矢作古川河口部東岸で正法寺古墳が、次いで御津で船山1号墳が築造され、海を意識した旧国単位の大首長墓が築かれている。この時期の太平洋沿岸交通が重視され、古代の「国津」レベルの大型港津が整備されたことが伺える。また同様の事象は他地域でも確認されており、安濃津の三重県津市池の谷古墳、大之浦の静岡県磐田市堂山古墳、君津の千葉県君津市内裏塚古墳も同様に評価される。

中期は韓半島派兵のための渡海が頻繁に行われ、北部九州系横穴式石室が東海や北陸にもたらされるなど、汎列島規模で海上交通のさらなる整備が進められた時期である。大型前方後円墳の出現や大型港津の新たな出現も、こうした一連の政治的な流れの中で評価すべきだろう。

さらに後期になると港津遺跡の数は増え、航海技術の発達とともに「津々浦々」の表現が適正なほど多数設けられた。これは後期の地域開発の活発化が海浜部にも及んだことを推定させる。内湾航海や近距離航海を前提に、太平洋沿岸の大動脈と言える交通路にまわりつくようにして海上交通網が細密化され、海浜部の生産遺跡の増加は在地の首長たちが積極的に取り組んだ地域振興策として港津と不可分な存在であった。権力の象徴ともいべき中期の港津とは異なり、より地域に即した実益のある港津が次々に出現したのであり、こうした港津の変化には内陸部の土地

開発と同様に、古墳時代後期の社会変化が反映している。

こうした中で、後期初頭から進められた年魚市潟の開発は大豪族・尾張氏の勢力拡大と権力誇示の表現手段であった。まさしく東海古墳時代の大画期と目される事象と言える。少なくとも伊勢湾岸の製塩遺跡に尾張氏が関与したことは想像に難しくなく、製塩遺跡の増加に大豪族の関与とテコ入れも想定されるところである。

また、湖西窯産の須恵器が7世紀以降、広く東国に流通する事実や、横穴式石室や横穴の構造に西日本と東海、東海と関東との関りが伺われるなど、情報交流や物流は汎列島の拍車をかけている。これも海上交通の活発化を背景にした遠隔地間の需要と供給の関係を示すものである。

## おわりに

以上、推測を重ねるかたちで尾張・三河の港津遺跡を紹介してきた。船着き場など港津の遺構自体は遺跡として認知されない場所に存在することが多く、その具体相を明らかにすることは難しい。今後も周辺の状況を丹念に拾い上げながら、その判別と評価を個別に進め、正確な港津像を描き出す必要がある。

とくに、尾張・三河と遠隔地との具体的な交流は、当該地の状況の緻密な検討を必要とするが、今回はその責任を果たすことができなかった。今後の理解に向けてまずは本稿を、その足がかりにしておきたい。

## 註

- (1) 衣浦湾口の支谷に所在する阿久比町二子塚古墳は、古墳時代中期の前方後円墳とされているが、墳丘の改変が著しく考古学的な調査が行われていないため実態が不明瞭である。その実態が判明すれば、衣浦湾口付近の港津と地域的な評価は大きく変わる可能性がある。

## 参考文献

- ・石川明弘 1987「東三河出土6世紀前半までの須恵器」『ホリデー考古』第7号 ホリデー考古刊行会
- ・岩原 剛 2015「東三河における古墳時代海浜集落遺跡の特質」『三河考古』第25号 三河考古学談話会
- ・岩原 剛 2021「豊川市南部地域の古墳の動向」『研究紀要』21号 豊橋市美術博物館
- ・「海古墳を考えるⅥ」実行委員会 2017『學術研究集会 海古墳を考えるⅥ 三河と伊勢の海ー古墳時代の海道を往還するー』同実行委員会・海古墳を考える会
- ・久曾神昇 1967「万葉集「引馬野・安礼乃崎」考」『愛知大学総合郷土研究所紀要』第12輯 愛知大学
- ・西島庸介 2015「西三河における古墳時代臨海遺跡の特質」『三河考古』第25号 三河考古学談話会
- ・早野浩二 2005「臨海古墳時代集落ー松崎遺跡の歴史的素描ー」『愛知県埋蔵文化財センター研究紀要6』(財)愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センター
- ・藤岡謙二郎 1964「古代東海三国の地域中心と国府の調査ー参河・遠江・駿河の場合ー」『立命館文学』第223号 立命館大学人文学会
- ・穂積裕昌 2000「紀伊半島東南部の古代港と海上交通ー記紀熊野関連説成立の前提ー」『Mie history』vol.11 三重歴史文化研究会
- ・穂積裕昌 2001「志摩の古代港」『伊勢湾考古15』知多古文化研究会
- ・穂積裕昌 2005「伊勢湾西岸域における古墳時代港津の成立」『考古学に学ぶⅡ』同志社大学考古学シリーズ刊行会
- ・三河考古学談話会 2015「特集 古墳時代の海の集落遺跡」『三河考古』第25号
- ・宮原佑治 2015「三重県における古墳時代海浜集落の特質」『三河考古』第25号 三河考古学談話会

※本稿で事実記載として取り上げた典拠となる報告書や市史などは、紙幅の都合から割愛した。ご寛恕をお願いしたい。